令和6年度 学校関係者評価報告書

1.

1.学校関係者評価の目的

1）教育に関する知見を有する者、臨地実習施設の関係者、看護管理者経験者、卒業生などの関係者から、学校運営・教育活動の現状における課題について助言を得ることで、学校運営の継続的な改善を図る。

2）学校関係者との連携協力により、特色のある学校づくりを推進する。

2.学校関係者評価委員名簿

規程	所属 氏名
教育に関する知見を有する者	京都教育大学 副学長 相澤 伸幸
臨地実習施設の関係者	京都医療センター 看護部長 髙田 幸千子
看護管理者経験者	元やまと精神医療センター看護部長 川上 起久子
卒業生 （卒後一定のキャリアを持った者）	淡海医療センター 副看護部長 前城 公子

3.学校関係者評価委員会の実施状況

実施日時：令和7年3月7日（金）15:00～16:30

実施場所：京都医療センター附属京都看護助産学校 会議室

4.学校関係者評価委員会の議題

〇学校関係者評価の概要について

〇令和6年度 自己点検・自己評価結果

〇令和6年度 重点目標について

・看護学科の取り組み

・助産学科の取り組み

〇意見交換・総評

Ⅱ 令和6年度 京都看護助産学校 重点目標

1.学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

2.将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

3.学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

4.職員が働きやすい職場環境の充実Ⅲ 重点目標についての取り組みと今後の課題

Ⅲ.各学科の取り組み

【看護学科】

重点目標1.学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

〇開始後3年となった新カリキュラムの評価を実施し、次の取り組みを行った。

①学生の臨床判断能力・看護実践能力を向上する教育の実施

②地域・在宅看護論における家族看護・学校地域の保健福祉の理解

③保健医療福祉における多職種連携の理解

④e-テキストの利用

完全な e-テキストの利用開始は、令和6年度からであり、継続して評価する。

〇看護学科・助産学科学生の相互学習の実施

・看護学科　母性看護学実習において助産学科学生とともに学ぶ。

・助産学科「ファミリー教室」のリハーサルに、看護学科2年生が対象者役で全員参加。

〇教員の教育実践能力の向上

〇臨床との連携における実習指導案の作成

〇実習科目のルーブリック評価表作成の開始、教員の評価視点や考え方の共有

今後の課題と取り組み

・新カリキュラムの評価結果を踏まえて、講義・演習・実習における教授方法を工夫して学生の看護実践能力（特に臨床判断能力・看護技術）を高める。

・看護技術力の高め、卒業できるように1年次の技術試験の検討・実習における経験率の上昇・卒業前の技術確認を強化する。

・地域・在宅看護論における地域で生活する人々の理解にむけては、学校地域と生活地域の比較をし、理解がすすむように工夫が必要。

・学生の自己評価能力を高め、評価の客観性を確保するためにルーブリック評価を完成し、使用・評価をおこなう。

・教員の研究活動　1題/2人以上

重点目標2.将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

〇看護学科・助産学科の協働による学生募集活動

〇推薦入試（公募制）・社会人・一般入試の入試科目の変更、一般入学試験3回実施

〇国家試験合格率の維持に向けた学習支援

・1年次から「朝活」（毎日 10 分の朝学習）実施

〇国立病院機構および京都府内施設への就職者の確保（NHO 78% 京都府 69.5%）

・就職指定校推薦の導入開始にともなう学生支援の開始

〇学校の運営方針に係る毎年度評価に基づく学校のあり方検討

〇効果的な内省による社会人基礎力の向上にむけた支援

・社会人基礎力の経年評価について

⇒卒業前の社会人基礎力が全般的に最も高い。学校生活や実習において、高めることはできている。

全学年、倫理性や規律力、傾聴力は高い。一方働きかけ力・創造力・発信力は低いが経年で上昇していく。

今後の課題と取り組み

・定員充足にむけ、自校の強みをアピールした学生募集活動の継続

・Web 出願方式の取り入れ

・入試を評価し、定員確保に向けた取り組み
・就職指定校推薦にむけた1年次からの学生支援
・社会人基礎力の経年変化を学生が自覚できるように、定期的評価で個人のレーダーチャートを作成し、内省しながら成長できるように支援する。

重点目標3. 学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

〇ICT を活用した教育の充実
　e-テキスト活用方法の指導、グーグルクラスルームの活用、防災時安否確認の作成、成績管理システムの更新
〇学生グループ活動による学習支援
〇自己学習能力・自己評価能力向上にむけた支援
　ルーブリックを用いた自己評価の導入、グループワークの実施）
〇学生サポート体制の充実
　個別面談、対面カウンセリングの開始

今後の課題と取り組み

・e-テキスト、学生便覧・シラバスの電子化をすすめながら、学生の効果的な学習支援を継続する。
・学校内 Wi-fi の活用　全学生が利用できるように整備を進める
・老朽化にともなう学校設備の整備、床材の貼替
・実習全科目においてルーブリック評価を取り入れ、主体的に学ぶ学習環境を整える。

重点目標4. 職員が働きやすい職場環境の充実

〇学生ファーストの視点で業務の効率化をめざして、教職員間で調整して相互協力のもと各役割に取り組んだ。
〇勤務は、自己の時間管理のもと計画して取り組んだ。時間外勤務は、昨年度よりも増加したが、休憩時間の確保はできた。
〇年間平均1人、年休9日以上取得した。

今後の課題と取り組み

・業務計画を立案し、計画的に協力して業務を遂行して、評価していく。費用の制限はあるが、可能な限り ICT 化を進める。
・教員間連携を図り、業務の重複をさけ、業務の効率化を図る。
・年間計画を立案して、業務を効率的にすすめ、年休取得や研究活動時間を確保していく。

【助産学科】

重点目標1. 学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

〇学生の臨床判断能力・看護実践能力の向上をめざした教育の実施
・当校独自のカリキュラムの実施（シミュレーション教育・OSCE）
・健康教育実習「赤ちゃん講座」（中高生への性教育）、「ファミリー教室」（出産準備教育）の学生による企画・運営
・分娩介助実習は一人あたり 9 例以上を履修した。
・分娩介助評価表による到達度の分析
〇看護学科・助産学科学生の相互学習の実施
・看護学科　母性看護学実習においてともに学ぶ。

・助産学科「ファミリー教室」リハーサルに看護学科2年生を模擬対象者として全員の受け入れ
〇教員の教育実践能力の向上
・NHO3校での授業研究
・学会・研修参加
〇実習指導の充実に向けた臨床との連携

今後の課題と取り組み

・当校独自のプログラムのシミュレーション教育、OSCE について、研究的に取り組み、個々の学生に応じた教育方法を検討する
・分娩介助評価表による到達度を実習施設ごとに分析していく。卒業時点で到達が不十分な能力を明らかにし強化する。

重点目標2. 将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

〇オープンキャンパス
オンライン・現地開催のハイブリッドで開催し、遠方からも参加しやすい
〇広報活動：ホームページに動画の掲載
〇入学前就職説明会を実施
就職試験が早まる傾向を受け、入学前に個別相談を実施。

今後の課題と取り組み

・参加者のニーズに応じたオープンキャンパスに向けたプログラムの工夫
・自校の魅力を発信し、優秀な学生を確保していく

重点目標3. 学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

〇ICT を活用した教育の充実
・e-テキスト活用の検討
・グーグルクラスルームの活用、実習記録の ICT 活用に向けた検討
・防災時安否確認の作成
・成績管理システムの更新
〇実習中の報告・連絡・相談体制（担任用メールを用いた相談・指導）
〇学生グループ活動による学習支援
〇学生サポート体制の充実（個別面談、対面カウンセリングの開始）
〇国家試験対策：合格 100%をめざした系統的な試験対策の実施

今後の課題と取り組み

・現行の ICT は活用しつつ、次年度導入予定の e-テキストにおける学習支援をはかる。
また、今後導入予定の臨地実習支援システム（実習記録の ICT 化）の構築をはかる。

重点目標4. 職員が働きやすい職場環境の充実

〇教職員間の業務調整・相互協力によって効率的に業務を遂行
〇年間1人、年休 8 日以上を取得

今後の課題と取り組み

・業務計画を立案し、計画的に協力して業務を遂行して、評価していく。
・研究活動時間を計画的に確保していく。

Ⅳ.総評

1）看護学科

・18 歳人口は減少していく。教師をめざす人の大学院での奨学金は返還不要となるなど、確保に向けた取り組みは強化されている。18 歳もさらに大学に入学しやすくなり、今後ますます大学志向が強まることが予想される。専門学校における入学者の確保は苦慮するだろうが、よい教育をしていると思うので、引き続き努力されたい。

・学校と臨床が連携して教育を実践しているのは強みである。オープンキャンパスにおいても、母体施設の新人看護師に話をしてもらう、また、入学式後の保護者説明会においても卒業して就業している看護師が、学校での学びや就職後の状況を保護者に説明することで魅力を発信できると思う。

・看護学科において、3年間を経時的に社会人基礎力の自他評価を見ていくのは素晴らしい取り組みだと思う。友人との関わりの希薄さやコミュニケーションがとれないことが、学生の自己評価の高さにも影響する。対人支援の仕事になるので、経時的に把握していくことは大事だと思うので、続けていかれるとよい。

・自己評価能力を高めるために、全領域の実習において、ルーブリックによる評価を取り入れるのはよい。作成するのは、かなり大変な取り組みとなるので、NHO 学校間で協働できれば教員の負担が減るのではないかと思うので、検討していかれるとよい。

・教育において、e-テキストの導入と学力の関連はまだわからないが、使いこなせればよい面もある。導入後の学習状況について、時間をかけて評価しながら支援を継続していく必要があろう。

・看護学生と助産学生の相互学習ができるのは、強みであり、非常によい取り組みである。助産学生の学ぶ姿から自己を振り返った学生もいる。今後も評価しながら続けて欲しい。

2）助産学科

・毎年、評価を続けながら取り組みを続けられている。入試においても優秀な学生を選抜して学生数の確保ができている。少子化のなか、分娩数の確保が大変だろうが、引き続き努力されたい。

・看護学科・助産学科とも、人材派遣、教材の共同活用など病院と非常に連携していてよい。
高価な教材は、学生だけでなく、病院職員の教育にも活用できるだろう。

以上